The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	隣り合わせの運命についての物語 : ゼーバルト『移民たち』の場合
Author(s)	宮崎, 麻子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2017, 2016, p. 21-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/62099
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

隣り合わせの運命についての物語　― ゼーバルト『移民たち』の場合

宮崎麻子

1 はじめに

現代のあり方に大きく関わる過去の出来事について、文学作品が語ることの意味は何か。なぜ私たちは歴史的出来事について知ろうとするとき、フィクションの物語をも必要とするのだろう。フィクションの性質をもつ文学作品は、非芸術的な領域で流通する言説を再生産する場合もあるが、逆に、他の領域では表に出てきにくい事柄に光を当て、政治的言説と個人との関係性を示したり、問いに付したりするなど独自の機能をもっている。歴史的出来事をめぐる集合的記憶を扱う文学や芸術作品は、フィクションではない領域の言説（歴史学の学問的言説、ジャーナリズムなどの社会的言説、公的な場での言論、など）とは、たとえテーマが同様であっても、異なる効果をもちうる。しかしそれは一様ではない。ドイツ語圏では現代史の集合的記憶を扱う文学を記憶文学（Erinnerungsliteratur）と呼ぶことがあるが、その素材・形式は 1990 年代からますます多様化している。その背景として考えられる二つの文脈を確認しておきたい。

第一に、戦後 50 年以上が経過し、第二次世界大戦やホロコーストについて語る状況が変化し、記憶に取り組む世代が交代したことがある。1960 年代末から推進された西ドイツの「過去の克服」においてホロコーストの過去との社会的取り組みがなされてきたが、その文脈において蓄積された政治的言説は、文学の言説が時に批判的にも取り組む対象として現れるようになった。また、「過去の克服」においては加害者としてのドイツの姿が強調されるが、1990 年代からは、ドイツにおける戦争被害の話題が表に出る機会が増えた。

第二に、冷戦と東ドイツの崩壊により、歴史を語るという行為をめぐる問題が、とりわけナショナリズムとの関係で、改めて取り組みの対象となった。第二次大戦やホロコーストといった東西ドイツ成立以前の出来事、東ドイツ時代、そしてその崩壊後、これら断絶に満ちた時代の経験をひとつの連続性の中で語ることは自明ではない。

こうした諸問題と関わる近年の記憶文学に、人物をめぐる物語をいくつも積み重ねるような小説が登場している。上記第一の文脈と関係する W.B.ゼーバルトの『移民たち 四つの長い物語』（1992）、そして両方の文脈に関係するジェニー・エルペンベック『襲来（Heimsuchung）』（2008）――どちらの小説においても、複数の人物についての物語がかわるがわる語られる。このような形式の小説が記憶文学において登場することには、どのような意味があるのだろうか。このような小説を読むとき私たち読者は、どのように歴史と対峙するのだろうか。注目されるのは、どちらの作品においても、異なる物語どうしの間に類似した要素が現れることである。作品全体を読む読者が、ある人の物語に別の人の物語と共通する要素を認識することにどのような意味があるのだろうか。本稿ではゼーバルト『移民たち』における物語の並存とモチーフの反復の機能を分析し、フィクション物

語を通して歴史的出来事の記憶に関わることの意味について考えたい[1]。

2 ヴァリエーションとしての複数の物語

ゼーバルトの『移民たち 四つの長い物語』は、副題の通り四つの物語から成る。個々の物語を単独で読むことも可能だが、どの物語にも主人公の名前がついており、一連のシリーズになっている。主人公はみな男性で、語りの現在において三人は既に故人、最後の主人公は病院でおそらく死に近いという状況だ。どの物語においても、語り手が過去に主人公と知り合った経緯や話したことなどを思い出し、さらにその人物ゆかりの場所や人を訪ね、資料も入手する。このスタイルが一貫していることや、物語の長さが一方的に長くなっていくことによって、全体がまとまりをもったひとつのテクストとしての姿を現す。

四つの物語には、共通のテーマやモチーフが現れる。どの物語においても主人公たちの人生がユダヤ人迫害の歴史に何らかの形で巻き込まれている。あるいは巻き込まれているようであると推測される。どの主人公も出身国を出て、異郷で暮らす経験をもつ。第一の物語の主人公ヘンリー・セルウィンは、ロシア帝国時代のグロドノ（リトアニアの街）近郊の出身で、1899 年にイギリスに移民して医師となった人物である。移民前の幼少期にユダヤ教の学校（Cheder）に二年間通ったが、移民後はキリスト教徒として暮らし、英語風に名前の綴りを改め出自は隠していた（Sebald 1994: 31-33）[2]。第二の物語「パウル・ベライター」は、ユダヤ教徒の祖父をもち、子供時代、ワイマール共和国時代の南ドイツで一家は差別を受けていた。しかしナチの定義で「4 分の 3 アーリア人」とされたパウルは、ナチの国防軍の兵士となる。第三の物語「アンブロース・アーデルヴァルト」の主人公は、南ドイツ出身だがスイス、イギリスのホテルで働いた後、1910 年頃に渡米、ユダヤ系銀行家の執事となる。この銀行家の息子コスモと絆を深め、彼とヨーロッパやエルサレムに旅行に行く。第四の人物マックス・アウラッハはユダヤ教徒の家庭で育ち、1939 年に単独でイギリスに渡ってホロコーストから逃れたが、彼の両親はリガの収容所に送られ 1941 年に殺害された。

登場人物たちがドイツを去り移民となった時期は、1899 年（ヘンリー・セルウィン）、1900 年頃（アンブロース・アーデルヴァルト）、1935 年（パウル・ベライター、ただし 1939 年に帰国）、1939 年（マックス・アウラッハ）であり、多少のばらつきがある。一方で、四人の主人公たちが全員男性であることや、晩年に精神を病んだことなどは、類似した人生の型を示唆している。

四つの物語、四人の主人公に類似がみられるとしたら、それは語り手によって選ばれた

---

[1] エルペンベックの小説『襲来（Heimsuchung）』において複数の物語がかわるがわる語られることについては、2015 年 6 月にフィンランドのトゥルク大学にて開催された国際学会 Ethics of Storytelling: Historical Imagination in Contemporary Literature, Media and Visual Arts での口頭発表（Miyazaki, Asako: Repetition of Things and Variation of Experiences: Jenny Erpenbeck's novel *Visitation*）で議論した。その後、下記の論文の一部で短く言及したが、いずれ場を改めて考察したい（Miyazaki 2017: 30, 34-35）。

[2] 以降の箇所では、Sebald のテクストからの引用はページ数のみ示す。

ものである。ドイツ出身の語り手が、これまでの人生の中で知り合った多くの人々の中から類似を感じさせるような四人を対象として選び、類似を感じさせるように語っているのだ――ナチが支配したことのある地を去って移住した男性であるという点で、語り手自身も類似の列に加われるような形で[3]。1980 年代に、語り手はイギリスのノリッジに拠点を置きつつ、四人の人物のことを思い出し、同時進行的に、彼らについての調査旅行に出かける。語り手は 1984 年 1 月にパウル・ベライターの死の知らせを受け取り（41）、同年初夏にアンブロース大叔父の旅行記の解読を終え、大叔父が亡くなったイサカの精神病院を訪問しに渡米する（153-171）。また、彼がスイス滞在中にヘンリー・セルウィンのことを思い出したのは 1986 年とあるが（36）、この年の夏、彼はパウル・ベライターの調査でスイスのイヴェルドンに行っている。イヴェルドンには、パウル・ベライターの晩年を良く知る女性ルーシー・ランダウがいるからだ（63）。もしかしたら彼がセルウィンを思い出したのは、この旅の途上だったのかもしれない。

語り手は、四人の人物それぞれにまつわる事実をできるだけ正確に調べようとしてはいるが、それぞれの人物に固有の事実をただ求めているのではない。彼が興味をもって調べる移民たちは一連のシリーズとして認識され、彼の語りの中で暗に関係しあう。

3 隣り合わせの可能性としての収容所という運命

この作品で語られる四人の人生が、プリーモ・レヴィやジャン・アメリーのような強制収容所を生き延びた作家を連想させると言われることがある（川島 2015: 168; 中野 2016: 120）。確かに、人生の後半期に深刻な精神的危機に陥り自殺に至った男性という点はレヴィらと共通している。登場人物のうちヘンリー・セルウィンとパウル・ベライターは自殺し、アンブロース・アーデルヴァルトは記憶や人格を破壊するようなショック療法を自ら進んで受け、精神病院で亡くなる。しかし、四つの物語の主人公たちは強制収容所に入った経験をもたない。この点でレヴィらとは決定的な違いがある[4]。第二次世界大戦中、ヘン

---

[3] 語り手自身についての情報は付随的、断片的に言及されるにすぎないが、『移民たち』を注意深く通読すると、語り手の人生が垣間見えてくる。彼は 1944 年頃に生まれ、幼少期は南ドイツの W 村で育った。母方の伯母や伯父は 1920 年代後半にアメリカに移住していたが、1951 年に親戚一同が故郷の W 村に集まり、その際に一時帰国した晩年のアンブロース・アーデルヴァルト大叔父に語り手は会う（97-99）。1952 年の 12 月、彼は両親とともに W 村から 19 キロ離れた町 S に引っ越し小学校三年生に編入、教師パウル・ベライターが担任となる（45-47）。アメリカ占領軍を間近に見ていた思春期、いつか自分もアメリカに移民すると考えていたが（101-102）、1966 年 22 歳でイギリスに移住（219）、マンチェスターで画家マックス・アウラッハと知り合う。マンチェスターで三年間研究活動を行った後、1969 年夏にスイスで教職（Schuldienst）に就くが、一年もしないうちにイギリスに戻ることを決め、ノーフォーク州ノリッジで就職（263）。その近郊ヒンガムで家を探した際、ヘンリー・セルウィンに出会う（7-14）。その後しばらく、セルウィンの妻がもつ住居に語り手とその妻クララは間借りした。

[4] この小説がホロコースト文学として捉えうるにもかかわらず、強制収容所や殺害を描く場面がなく、小説内の写真にもホロコーストを証言する機能がないことについて、収容所の体験とは証言不可能なものだという議論と結びつけられたり（川島 2015: 171）、それを安易に描くよりも空白として提示することで想像を誘う戦略だと解釈されたりしている（中野 2016: 120）。そうした側面はあるだろう。しかし、もしそれらだけならば、収容所から生還した人物たちが体験について口を閉ざしていたことを描くような小説でもよいはずだ。そうではなく、それを体験していない人物が次々に登場する小説であることに、何かを体

リー・セルウィンとマックス・アウラッハはイギリスに、アンブロース・アーデルヴァルトはアメリカに在住していた。パウル・ベライターはナチの国防軍兵士となった。「移民たち die Ausgewanderten」とは、単に故郷を去った人々というだけではなく、強制収容所への移送という運命の道筋から「外に逃れ出た人々」なのである[5]。収容所で亡くなった人々は主人公たちの周辺にいて、ごく簡潔に言及されるにすぎない。パウル・ベライターの婚約者や、マックス・アウラッハの両親などだ。主人公たちにとって収容所は、身近なところに存在を感じられると同時に想像困難でもある対象に違いない。「移民たち」は、もし少し運命が異なれば（もし移住していなかったら、もし生年が違っていたら…）強制収容所に送られていたかもしれない、という可能性と隣り合わせにいた人々だといえる。

語り手が調査の過程で話を聞く人々の多くも、この点で「移民たち」のヴァリエーションを成している。パウル・ベライターの晩年のパートナーであったルーシー・ランダウや、アンブロース・アーデルヴァルト大叔父について語るフィーニ伯母、カジミール伯父。彼らもまた移民としてホロコーストという出来事を、遠くから、しかし近いものとして認識した人々であろう。ユダヤ教徒かどうか、ニュルンベルク法におけるユダヤ人の定義にあてはまるかどうか、といったカテゴリーへの所属とは関係ないところで、収容所に送られた可能性との近接性をもつ人々の話を、語り手は多く聞き、報告する。そこにあるのは、類似性や近接性を起点として、自らの存在に潜む＜他でありうる可能性＞について想像する行為である。「移民たち＝あの運命の道筋から逃れ出た人々」が繰り返し登場するこの小説は、この行為の連鎖に読者を巻き込もうとする。

4 個別性から一般性へ：類似と反復

他の運命をたどった可能性と隣り合わせにいる人々の物語がヴァリエーションとして現れることに加え、写真やモチーフも反復的に登場する。どの物語にも文章の途中に写真が時折添えられるが、木の写真や墓の写真が異なる物語に現れ[6]、その反復性はひとつひとつの被写体の個別性を揺るがす。ひとつの物語の中で、ある写真とその周囲の文章とを対応させるだけならば、たとえば写真の中の家は語り手が訪れた（とされる）ヒンガムの屋敷であり、写真の木はヒンガムの木であると理解される。しかしそれでは済まず、木の写真が複数の物語において登場することで、木一般というレベルが導き入れられる[7]。対象の一

験していない者――読者を含め――がその歴史といかに関わるかという問いを本稿では見出だしたい。

[5] 題名の die Ausgewanderten は過去分詞の名詞化であり、移民という意味で頻繁に使われる die Emigranten（あるいは die Auswanderer）よりも、「外へ出て行った」という状態を強く感じさせる。

[6] 『移民たち』における写真の機能として、ドキュメンタリー性を演出する機能や、家族をめぐる語りを誘発する機能（Long 2003）、あるいはロラン・バルトの写真論を念頭に、死者との出会い促す亡霊的機能（川島 2015）などが論じられている。

[7] 『移民たち』を通じて反復や偶然の一致があることで、「隠れた秩序」があるという印象が生じ、それによって作家が物語世界にたいしてもつ支配力が揺るがされる効果（Durantaye 2008: 441）や、歴史の救済の可能性が示唆される効果（Long 2003: 137）があるとも指摘されている。しかし偶然の一致を演出しているのも作家であり、作家性が不安定化するという点には疑問が残る。また、「魔法のような秩序」（Long）によって誰が（何が）救済されうるのかは不明である。

般性に光が当てられ、対象どうし――この木とあの木――が潜在的な互換性をもつ。

類似したエピソードやモチーフの反復は同時にフィクション性をも強調する。写真だけでなく、書くことと読むことについての話題（Ceuppens 2006）や、アルプスの山が舞台となる場面も全ての物語を通して繰り返し登場する。中でも、ナボコフの度重なる登場はフィクション性をはっきりと導き入れる。『移民たち』においては、ナボコフが昆虫学者であったことと関連して、蝶を追う男というひとつの形象が、ナボコフという人物のイメージから作り出されている。第一の物語には、まさに蝶を捕る網をもつナボコフの写真が登場する（後述）。第三の主人公アンブロース・アーデルヴァルトはイサカで蝶を追う中年男性を何度も見かけ、彼を「蝶男（butterfly man）」と呼んでいた（151, 170）。第四の主人公マックス・アウラッハも、スイスの山で、蝶を捕る網をもった 60 歳くらいの男性に話しかけられ、この「蝶人間（Schmetterlingsmensch）」に下山を促されたという（259）。アウラッハの母は、南ドイツのバート・キッシンゲンで蝶を追う少年に出会ったことを日記に記している（319）。これらのエピソードはそれぞれ、ナボコフが実際にいた場所・時期と対応しているという（Durantaye 2008: 427-433）。ナボコフの自伝的事実について自伝『記憶よ、語れ』が参照項となっていることは、第二の物語において、同書を読む女性ルーシー・ランダウがパウル・ベライターと知り合った場面（65）で暗示されているといえるだろう。四人の主人公全員（アウラッハに至ってはその母までも）が「蝶男」たるナボコフと関係をもち、しかもそれがナボコフの伝記および伝記的エピソードに対応しているという不自然なほどの偶然の一致は、フィクション性を作品に導き入れる[8]。すると各写真に写っているのが本当にヒンガムに実在する屋敷なのか、写っている人物がパウル・ベライターという名の男性なのか、その保証のなさが露呈する。このとき写真に見出されるのは、あるひとつのどこかの屋敷、あるひとりの成人男性、などである。写真はこのとき、対象物につく定冠詞を不定冠詞へと変化させ、固有性を一般性へと媒介するメディアとして機能する。

5 写真における運命の隣接

網をもつ「蝶男」あるいは「蝶人間」は、ある人の物語から別の物語へと出入りする形象にほかならない。この形象には、他人の人生の物語に触れることというテーマを読み込むことができる[9]。前項で述べたように、さまざまなモチーフの類似と反復はフィクション

---

[8] これは長編『アウステルリッツ』（2001）において A がつく人物名が不自然なほど多く登場することでフィクション性が強調されることに（Elsaghe 2007）、似ている。

[9] Carol Jacobs は、『移民たち』において類似したイメージやエピソードが文脈を超えて反復的に現れることを、花から花へと花粉が蝶によって媒介されることに喩え、受粉（cross-pollination; Bestäubung）の身振りがテクストを貫いているという（Jacobs 2007: 918）。Jacob はこのことの意味を次の二点に見出す。第一に、これは想起のメカニズムと対応している。過去が強迫観念のように差異を孕んだイメージとして反復していくメカニズムだ。第二に、起源なき反復として人物たちを把握したとき、彼ら個々のアイデンティティは確たる輪郭をもたない。発音が似ている三つの人物名はそれを象徴的に示す。こうしたことから Jacobs は、『移民たち』にはアイデンティティの政治に対抗するダイナミズムが通底しているとする。誰がユダヤ人で誰がそうでないか、といったことを決めようとする人種主義的な欲望に対抗するダイ

性と対象物の一般性を確保するが、これによって生じる最大の効果は、ある人と別の人との運命の互換性が想像可能となることであろう。ナボコフが最初に言及される箇所では、それがとりわけはっきりと見て取れる。ヘンリー・セルウィンは生前、クレタ島旅行の写真を語り手に見せた。家庭用の映写機で示された旅行写真の中に、セルウィンが蝶を捕る網をもっている写真があり、その一枚はスイスの雑誌に掲載されたナボコフの写真――スイスのグシュタート山に立つナボコフの写真――と「細部に至るまで似ていた」(26) という。語り手は数日前にその雑誌の写真を切り取っておいたためにこの類似を認識できたといい、その写真（と思われるもの）がテクストに掲載されてもいる（27; 図 1)。しかし網をもつナボコフの姿にセルウィンが細部まで似ているというのはあまりに不自然であるし、語り手がナボコフの写真を雑誌から切り取っておいたという話も出来過ぎている――そもそも一体なぜ写真を切り取っておいたのか、語り手は説明しない。不自然すぎる偶然の一致はフィクション性を強調する。そして、虚構の領域でこそ＜他である可能性＞が活性化される。リトアニアのユダヤ教徒の子供であったセルウィンは、強制収容所に送られる運命を隣り合わせの可能性として抱いていた人物である。そのことへの反動のように彼はナボコフという、同じロシア帝国出身でありながらも全く別のタイプの移民の人生――ロシア革命を逃れ、後に作家となった――を、また別の隣り合わせとして呼び寄せつつ、同時に「蝶男」という形象、つまり網を片手に世界を飛び回り、人々の物語に触れようとするキャラクターを作り出しているのではないだろうか。

左 : 図 1（27）　　右 : 図 2（278）

セルウィンとナボコフが奇妙に同居するこの写真（図 1）は、第四の物語アウラッハの父親の写真（図 2）が掲げられる際に、改め

ナミズムをテクストがもっているというわけだ 。本論では、『移民たち』が一連のシリーズとして複数の人物を提示するとき、それはただアイデンティティの政治に対する抵抗の契機であるだけでなく、ひとの運命の潜在的な互換性について想像力を誘う契機でもあると考える。

て思い出される。スキー旅行中のアウラッハ父の写真は、奥に山脈が見渡せる構図、立ち姿の姿勢(首や腕の角度)などにおいてセルウィン兼ナボコフの写真にやや似ているのだ。アウラッハの父親はダッハウ収容所を経験し、後にラトヴィアのリガに送られ殺害された人物である。こうしてセルウィン、ナボコフ、アウラッハ父、という三人がたどった異なる運命が、写真の構図、およびスイスやバルト地方（リトアニア、ラトヴィア）といった共通項を通じ、どこか隣り合わせのものとして現れる。さらに写真の画像は＜山の上に立つ男性＞という一般性を持つ集合を示唆し、隣接性および潜在的な互換性の連鎖は、三人の例を越えて広がりをもつ。

このようなダイナミズムは、作品終結部における三人の女性の話にも見出せる。語り手はマンチェスターのホテルに滞在中、以前フランクフルトのユダヤ博物館で見たウッジのゲットーの記録写真を思い出す。そのうちの一枚に、ゲットー内の織物工場で働く三人の女性労働者が写っていた。思い出しながら語り手は、三人に Rosa, Luisa, Lea という三つの女性名をあてはめたり、ローマ神話における運命の女神三人の名前をあてはめたりする（355)。さりげなく出てくるが Rosa は語り手の母の名（110)、Luisa は、マックス・アウラッハの母でホロコーストの犠牲となった Luisa Lanzberg の名である（285)。この写真はテクストに掲載されず[10]、どの位置に誰がいるのか定まらない――二人の母、そしてウッジのゲットーの女性たちが、定位置をもたず並び合い、重なり合う[11]。さらに注目すべきことに、語り手はわざわざ、写真を視る自分が撮影者と同じ立ち位置にいるのだと言う。

> その若い女性たちの事を私は知らない。[...] だが三人がみな私のほうを見ているように感じた。というのも、会計士ゲーネヴァインが写真機を構えて立った位置に私は立っているのだ。(354)

語り手は被写体を視る位置においてゲーネヴァインという、ナチのために記録写真を撮影した会計士に取って替わる。あの山の写真の中でナボコフにセルウィンが取って替わるように。見知らぬ他者の運命が自分と隣り合わせにある状態を語り手はここで示す。その語り手が写真に視ているのはやはり、名前の当てはめ方から分かるように、複数の運命が隣り合う様子、そして異なる運命と交錯する様子なのだ。

---

10 ウッジのゲットーの記録写真（三人の女性労働者が写っているものを含む）は実在し、フランクフルトのユダヤ博物館の下記サイトからダウンロードすることができる。
http://www.juedischesmuseum.de/lodz-dias.98.html （最終閲覧 2017 年 4 月 3 日）

11 写真の女性たちがその後たどった最終的な運命はわからないが、史実をみるとウッジ（ウーチ）のゲットーは劣悪な住環境で、不衛生、食糧不足、病気が蔓延した。1940 年 2 月に設置された頃は 16 万人以上の住民が押し込められたが、1944 年 8 月には 4 万 3725 人しか生存しておらず、彼らも最後には絶滅収容所アウシュヴィッツに強制移送されたという（芝 2008: 91-100)。

6 フィクションを通じて歴史と関わること

『移民たち』の登場人物たちは特定の誰かとしての個別性を超えて一般性へと媒介され、例としての意味をもつ[12]。このことはフィクション小説一般の登場人物において見出しうるかもしれないが、『移民たち』においては、物語を超えて反復・類似する写真やモチーフが人物たちの例としての意味を強く引き出し、歴史的出来事をめぐるノン・フィクションの領域の言説と対照性をもたらしている。そしてこのとき、人物たちは単に過去の時代を生きた人物の例であるだけでなく、他者の運命と隣り合わせにいるという存在形態の例でもある。

第四の物語の終結部で語り手は、マンチェスターのミッドランドホテルに宿泊中、ホテルから少し離れた自由貿易ホールのオーケストラの音や、リストン音楽ホールの歌を聞く（350-351）。作中では言われないが自由貿易ホールは 1940 年 12 月のドイツ軍の爆撃を受けており、ミッドランドホテルは爆撃を免れている[13]。語り手は爆撃を受けなかった建物にいて、爆撃された建物の音を聞くのだ。象徴的な場面である。強制収容所に送られなかった「移民たち」が、そこに送られた死者の声に――それを本当に聞くことはできないものの――耳を傾けることの比喩とも捉えられる。戦争やホロコーストのトラウマ的出来事を直接体験していない読者が、この物語を読みながら出来事の記憶に間接的に触れることの比喩にも見えてくる。

アウラッハは 1939 年からロンドンで学校に通ったことや、ドイツに残った両親との文通が 1941 年に途絶えたことを語るが（285）、空襲については全く語っていない。しかしマンチェスター空襲と同年の 1940 年、ロンドンでさらに大規模な空襲があった。空襲という話題が沈黙されていることに気付くと、第一の主人公セルウィンも空襲を経験したのだろうか、という問いも湧く。生前セルウィンは第二次世界大戦について語り手に完全に口を閉ざしたが、1920 年代から 1960 年の間に外科医として「街で（in der Stadt）」開業していたことは話している（34）。彼にとって「街」というと、会話の舞台ヒンガムから近い都市ノリッジか、青少年時代を過ごしたロンドンのどちらかかもしれない。ロンドンは 1940 年に、ノリッジは 1942 年にドイツ軍の爆撃を受けている。アウラッハもセルウィンも空襲を経験した可能性はかなり高い。しかし断定はできない。フィクションである小説においては、歴史的事実の検証や記録との対比において、誰がどの歴史的出来事を体験したかを特定することは問題ではなく、それを体験したかもしれない可能性を誰もが含みもつことのほうが問題となる――そのような考え方が促される。

---

12 アガンベンは『到来する共同体』の中で、例が同類のもの全てに当てはまると同時にそれら同類のもののうちのひとつでもあることに注意を促す。例は個別にも普遍にも収まりきらない位置づけにある。例の属性は名指される（called）ものの、そのとき属性は言語による暫定的な指示でしかなく、例たる存在者の特異性が属性と関係ないところにあることも露わになる(Agamben 1993: 9-11)。ひとの属性は変わりうるという潜在的な可能性（潜勢力）をアガンベンは『到来する共同体』で幾重にも描き、そこではひとは「何でもありうるが何であっても特異な存在（whatever singularity）」と呼ばれる。

13 http://www.manchestereveningnews.co.uk/news/greater-manchester-news/gallery/manchester-blitz-75th-anniversary-10453709 （最終閲覧 2017 年 3 月 7 日）

複数の物語が並存する形式は多様なジャンルの小説に採用されうる。しかし記憶文学においてこうした形式の小説が登場するのは、ホロコーストや世界大戦の生還者が減っていく時代において歴史的出来事の記憶にいかにアプローチするかという問題と切り離せない。隣り合わせの運命という考え方は、立場の互換性、つまり加害者と被害者の布置が固定されなくなることにもつながり、戦後補償や加害者の責任追及とは緊張関係にある。戦後処理が収束するまでは言説として流通することが困難であったと考えられ、また、その後も芸術作品の領域においてこそ展開していく考え方であろう[14]。

隣り合わせの運命という歴史的想像力の形は、ひとが自ら経験していない出来事の記憶にアクセスし、それを引き受ける技術として、文学の言説形式において開発される。フィクションの物語を通して歴史を知るという行為はこのとき、過去から教訓を得ることでもなく、歴史の語りを通して集団への所属を強化することでもなく、属性や所属を超えた可能性の領域で過去の出来事に巻き込まれることとなる。ゼーバルトの『移民たち』における類似や反復、物語の並存という形式は、それを促す装置なのだ。

文献

Agamben, Giorgio (1993). *The Coming Community,* translated by Michael Hardt, University of Minnesota Press. [アガンベン、ジョルジョ（2012）『到来する共同体』上村忠男（訳）、月曜社]

Ceuppens, Jan (2006). Transcripts. An Ethics of Representation in *The Emigrants*. In: *W. G. Sebald. History – Memory – Trauma*, edited by Scott Denham, Mark McCulloh, Walter de Gruyter, pp. 251-263.

Durantaye, Leland de la (2008). The Facts of Fiction, or the Figure of Vladimir Nabokov in W. G. Sebald. In: Comparative Literature Studies, Volume 45, Number 4, pp. 425-445.

Elsaghe, Yahya (2007). Das Kreuzworträtsel der Penelope. Zu W.G. Sebalds Austerlitz.

---

[14] ホロコーストをめぐる芸術表現の中で、立場の互換性という問題は 1960 年代から生じていた。たとえば高田は、ナチ裁判を題材としたペーター・ヴァイスの戯曲『追究（Ermittlung）』（1965）の上演において、ひとりの俳優が複数の役（被告と証人など）を演じる場合（Rollenwechsel）があり、それによって役割や立場の交換可能性（Austauschbarkeit）という論点が生起したことに注目している。これは、アイヒマン裁判（1961）をめぐる議論（ハンナ・アーレント『イェルサレムのアイヒマン』（1963）など）で、もとから悪魔のような人物というわけではない一般的な市民が加害者になりうる、という考えが提示されるようになった状況と連動している。当初は、ある人が被害者と加害者（収容所の囚人と看守など）どちらにもなりうるという考え方は受け入れられにくく、『追究』の演出における交換可能性はあまり注目されないか否定的に評価されたが、1980 年代以降には積極的に言及・評価されるようになっていったことが、さまざまな上演の劇評から分かるという（Takata 2016: 第 4 章）。ヴァイスの戯曲に読み込める（あるいはその上演が照らし出す）収容所というシステム内の役割（Rollen）どうしの交換可能性と、本稿でゼーバルト『移民たち』に見て取った、他者の運命を潜在的に隣り合わせのものとして捉える歴史的想像力とを比べると、後者のほうが、ホロコーストを体験していない世代がいかにその記憶と関係していくかという、想起の問題としての性質を強くもち、より遅い時期から展開する論点であると考えられる。

In: *Gegenwartsliteratur,* 6, pp. 164-184.

Jacobs, Carlo (2004). What Does It Mean to Count? W. G. Sebald's *The Emigrants*. In: *MLN (Modern Language Notes)*, Volume 119, Number 5, pp. 905-929. [Jacobs, Carol (2007). Was heißt Zählen? W. G. Sebalds *Die Ausgewanderten*. In: *Verschiebebahnhöfe der Erinnerung. Zum Werk W. G. Sebalds,* Edited by Sigrid Martin, Ingo Wintermeyer, Königshausen & Neumann, pp. 49-67.]

Horstkotte, Silke (2009). *Nachbilder. Fotografie und Gedächtnis in der deutschen Gegenwartsliteratur*, Böhlau.

Long, J. J. (2003). History, Narrative, and Photography in W. G. Sebald's Die Ausgewanderten. In: *The Modern Language Review*, Volume 98, Number 1, pp. 117-137.

Miyazaki, Asako (2017). Post-DDR-Literatur. Politische Diskurse über die DDR in der Literatur seit 2000. In: *Gegenwart schreiben. Zur deutschsprachigen Literatur 2000-2015*, edited by Corina Caduff, Ulrike Vedder, Fink, pp. 27-36.

Sebald, W. G. (1994): *Die Ausgewanderten. Vier lange Erzählungen*. Frankfurt a. M.: Fischer Tashenbuch. [W. G. ゼーバルト（2005）『移民たち　四つの長い物語』鈴木仁子（訳）、白水社] 邦訳を適宜参照したが、引用においては訳に改変を加えた。

Takata, Midori (2016). *Peter Weiss' Stück „Die Ermittlung" in der Erinnerungsgeschichte an den Holocaust*, Tectum Verlag.

川島健太郎（2015）「亡霊としての写真――W.G.ゼーバルト『移民』をめぐって」藝文研究 109－2, pp. 167-180.

芝健介（2008）『ホロコースト ナチスによるユダヤ人大量虐殺の全貌』中公新書.

中野有希子（2016）「W.G.ゼーバルト『移民たち』の「ドクター・ヘンリー・セルウィン」について」上智大学ドイツ文学論集、第 53 号、pp.109-122.

※　本研究は JSPS 科研費 26770118 の助成を受けた成果です。